MLA Code of Ethics for Health Sciences Librarianship の紹介

小野澤 繁 雄*

埼玉医科大学附属図書館

I. はじめに

1. 医学図書館員の倫理綱領：埼玉医科大学附属図書館の場合

埼玉医科大学は2000年に総合医療センター（川越市）で起こしてしまった深刻な医療事故以来、2000年を忘れるな！を合言葉に、医療現場にとどまらず組織の見なおしをすすめてきています。

そのなかで、学校法人の倫理綱領を新たに策定し、この中に建学の精神3項目、経営理念、運営方針4点を含めるとともに、倫理綱領4原則を新設しています（最終制定年月日は、2003年3月21日）。

倫理綱領4原則とは、公共的使命、社会的責任、法令遵守、自己責任原則ですが、これに合わせて、各職種の倫理綱領を採択することになりました。すなわち、役職員の倫理綱領のほか、次のような11職種です。

教 員
医 師
看 護 師
薬 剤 師
管理栄養士・栄養士
理学療法士・作業療法士・言語聴覚士
臨床検査技師
診療放射線技師
医学図書館員
ソーシャル・ワーカー
移植コーディネーター

各職種の倫理綱領は、所属団体に倫理綱領がある場合、そのまま、あるいは一部変えるなどして採択するというかたちをとっています。

こうした動きの中で、埼玉医科大学附属図書館（以下、当館）でも検討が必要になったという事情があります。

当館としては、倫理綱領を自前で作成するか、日本図書館協会（以下、JLA）のもの（「図書館員の倫理綱領（1980年6月4日総会決議）」¹⁾）を採択するか、もしくは医学図書館分野ということで Medical Library Association（米国医学図書館協会、以下、MLA）のもの（Code of Ethics for Health Sciences Librarianship；医学図書館員のための倫理綱領、以下、倫理綱領²⁾）を採択するか、選択肢は3つということになりました。周知のように、日本医学図書館協会（以下、JMLA）には、倫理綱領はありません。

倫理綱領がもつべき要件からして、自前で作成するには、他に選択肢がない場合以外ではありえません。

JLAのものは、初めて読んだというものではありません。個々には納得のいく記述がありながらも、HTML形式で出力したところ2ページ余というもので、簡潔とはいえないこと、対象も図書館専門職に限らないこと、などが考慮されました。前文のほか、6項目12ヶ条で構成されています。その6項目は、次の通りです。

図書館員の基本的態度
利用者に対する責任
資料に対する責任
研修につとめる責任
組織体の一員として
文化創造への寄与

MLAのものは初見でしたが、簡潔であり、医学図書館専門職を対象とするところから切実なところに触れてくるようなところがあること、などが考慮されたところでした。

MLAの倫理綱領は、前文（見出しは、倫理的行動にとって必要な目標と原則）のほか5項目（社会、利用者、所属機関、専門職、個人として）とも明解でバランスがよく、医学図書館専門職にとって（一部踏み込んだ内容ですが、当館の今後）に必要な項目がかき込まれているという感じがありました。こうした理由から当館では、MLAのものを選択しました。

*Shigeo ONOZAWA：〒埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38.

Tel.049-276-1416 Fax.049-295-9071

sonozawa@saitama-med.ac.jp

（2004年2月10日 受理）

ところで、この切実さですが、米国で 1980 年代に議論された医学図書館専門職にとっての倫理的事項を踏まえたところからもたらされたものだということに関係があります。この時点では、採択までに 10 年という年月が費やされたこと、その当初案、改正案の存在も知りませんでした。このあと、同僚とともに当館での採択に向けた翻訳作業が行なわれます。

この採択自体は、当館にとって一種背伸びといってよく、多くを今後の課題のかたちで残しています。

翻訳したものに説明前文を付し、名称は他の職種の倫理綱領と合わせたため、「医学図書館員の倫理綱領」となりました。現在は、法人の規程集に一括で収録されています。

2. 医学図書館の mission statement

mission statement の語を Google などのサーチエンジンで検索すると、ヒット件数は非常に多く、企業の多くが自社のホームページに mission statement を置いています。こうしたことは企業だけでなく、なかには University of Minnesota (ミネソタ州立大学、以下、UMN) の Bio-Medical Library ホームページのように大学図書館でも行なわれています。

ちなみに UMN Bio-Medical Library の mission statement³⁾ は、前文とサービス、開発努力、チームワーク、リーダーシップの 4 項目 4 条から成っていますが、サービスの項は次のようになっています。

“サービス—図書館職員は、すべての利用者に時宜に合った、正確で、完全な方法で、可能なかぎり最良なサービスを提供します”

ここには、サービスの質についての最大限の表現があります。こうした statement にみられる積極性の背景にあるものを考えた場合、明言することはできませんが、それは倫理綱領なのではないかと思いました。MLA の倫理綱領では“利用者”の項(3 条で構成されます)になりますが、次のような条文があり、この条文と読み合わせることで、statement の積極性につながっていることを推測できるのではないのでしょうか。

“医学図書館員は、最良の有用な情報が利用者に確実に提供されるように努力する。”

3. 個人としての責任

雑誌「JAMA 日本語版」1997 年 6 月号は、American Medical Association (米国医師会、以下、AMA) 設立地ペンシルベニア州フィラデルフィアで行われた

「倫理と米国医学：歴史、変化、そして挑戦」と題されたシンポジウムの紹介を行なっています⁴⁾。見出しは、「(米国医師会) 150 年祭で「患者に最善をつくす」ことを再確認」となっています。これは、AMA150 年祭の行事のひとつとして行なわれたものです。その記事中に“この職業(医師のこと)はそれ自体では存在せず、目的があって初めて存在するものであり、その目的は社会によって決定されていく”という個所があり、興味を持ちました。

AMA は、このシンポジウムを機に AMA 倫理研究所を新設しています。同じ記事中に「AMA 医療倫理規範」が収録されていて、これは前文と 7 条から成るものですが、前文中に“医師は患者に対する責任のみならず、社会や他の医療専門家、自分自身への責任も認識すべきである。”という表現があります。MLA の倫理綱領でも 5 項目中の最終項目が“個人として”となっていて、専門職としての責任とは別項で個人としての責任がうたわれています。この点に、日本との文化的背景の違いのようなどころとともに、両倫理綱領に共通する芯の強さのようなものを感じます。

翻って我々の状況を考えると、図書館規程に目的条項はありますが、主語は図書館であり、規程自体も学則に根拠を置くもので図書館員としての中身を考えるきっかけにはなりにくいように思います。専門的職員に対する言及は大綱化以降の大学設置基準でなされていますが、現在は大学評価の文脈のなかで取り上げられ、配置状況についてはそこで問題になっていても、専門的職員の内実については議論されることはありません。

4. 医学図書館分野の倫理綱領

医学図書館分野の倫理綱領を検索すると、MLA の倫理綱領と、あとで触れますが European Association for Health Information and Libraries (医学情報と医学図書館のための欧州協会、以下、EAHIL) の Code of ethics for EAHIL members がヒットします。

EAHIL は東京で 1985 年に開催された第 5 回国際医学図書館会議での関係者の集まりがきっかけとなって、正式には 1987 年に結成された組織で、会員は 25 国に及び、会員数は約 400、IFLA や MLA と連携関係があります。

日本科学技術振興機構(JST)が提供する国内医学文献データベース JMEDPLUS で検索した倫理綱領に関する記事のうち、医学図書館分野では 1 件がヒットします。本文中に MLA の倫理綱領についての言及がある記

表 1. MLA 倫理綱領案（1987 年に MLA 理事会に受理された綱領案）
(Draft MLA Code of Ethics)

情報組織の立案、開発、運営に、教育的プログラムや情報サービスの創出、提供に、ならびに健康情報科学の研究に、専門職としての質やリーダーシップをもって健康の向上に寄与する MLA の一員として、私は次のような倫理的責務を有する。

- ・利用者個人の信条やその情報の利用のされ方の如何に拘らず、利用者や利用者集団に最新、正確、適切な健康情報を提供する（非差別原則）
- ・健康情報を求める利用者個人の信頼やプライバシーを守る（信頼性原則）
- ・所属機関の使命に合致し、最高度の質をもった医療を確実に支援するような健康情報源を選択し、組織化する（献身的サービス原則）
- ・許容されないような健康情報を収集するといった不十分な働きによる過誤を避ける（説明責任原則）
- ・健康情報の生産、再生産、提供に関係するすべての法律を遵守し、また遵守するよう他に助言する（説明責任原則）
- ・健康情報科学において、個々人の専門的な競い合いを許すような高い基準を維持する（競い合い原則）

事で、その表題は「アメリカ病院図書室見学記―患者への医療情報提供―」というものです⁵⁾。これは県立がんセンター新潟病院情報調査部図書室の有田が 1996 年 3 月中旬に訪問したアメリカ 2 病院見学記です。患者図書室（病院図書館）で行なわれているサービスの根拠として MLA の倫理綱領が持ち出されていることが、なかで紹介されています。ちなみに、「患者への医療情報提供サービス：アメリカ 2 病院を見学して」という表題で、同様な報告が有田によって雑誌「医学図書館」でも行なわれています⁶⁾。こちらには長谷川の手になる MLA 倫理綱領日本語訳が収録されています。この稿では“利用者”としましたが、倫理綱領で 3 番目の項目“Clients”を敢えて“患者”としたところが長谷川訳の特徴といえます。なお、当館の翻訳作業では、その時点で長谷川訳の存在を知らなかったので、訳文を参照することはしていません。

II. MLA Code of Ethics for Health Sciences Librarianship

1. 倫理綱領採択の必要性和意味

MLA の理事会は 1994 年 2 月に前文と 5 項目にまとめられた倫理綱領を採択しました。これは直接には 1992 年に設置されたタスクフォースが作成した案が、

手順を踏んだ後最終的に採択されたものです。綱領は意思決定の際の指針となるものですが、採択は医学分野の図書館専門職に固有な倫理的事項が存在するということ、とともにそうした指針が必要なものだということを示します。

MLA は倫理綱領の補足文書「倫理綱領 その歴史と採択」の冒頭で、倫理綱領を、“倫理綱領は専門職としての品質証明であり、図書館協会のような組織の認識しているところでは、倫理綱領をもたずには専門性も疑問に付されうるし、そういった訳で情報分野の個々の状況を反映した倫理綱領が作成されることになります。”と述べています。

しかしながら、倫理綱領採択までの経緯をみると、会員の関心の薄さから一旦は採択を断念した時期もあり、当初案（1987 年に理事会に受理された綱領案、表 1）、改正案（1992 年年次総会に提案された綱領案、表 2）、最終案となったもの（1994 年理事会が採択した綱領案、表 3）と検討をかさねる中で、ここでいわれているような情報分野（医学図書館）の個別状況が反映された倫理綱領作成にこぎつけた、ということが判ります。

また、前にも触れましたが、こうした検討には倫理的事項について 1980 年代に米国で行なわれた議論が反映されています。このことは当初案が手直しされてゆくプロセスをみてみないと判りにくいかもしれません。活発

表 2. MLA 倫理綱領改正案 (1992 年 MLA 年次総会に提案された綱領案)
(Revised Draft Code of Ethics)

情報組織の立案、開発、運営に、教育的プログラムや情報サービスの創出、提供に、ならびに健康情報科学の研究に、専門職としての質やリーダーシップをもって健康の向上に寄与する MLA の一員として、私は次のような倫理的責務を有する。

- ・適切かつ有用に組織された図書館蔵書、公正かつ公平な貸出、収集、貸出方針、援助を求める要求に対する質の高い、正確で、偏りのない、親切な返答を通して、高い質をもったサービスを提供し、最高度の質をもった医療の提供を支援し、
- ・健康情報を求める利用者個人の信頼やプライバシーを守り、
- ・所属機関の使命に合致し、最高度の質をもった医療を確実に支援するような健康情報源を選択し、組織化し
- ・提供された情報の最新性、正確さ、関連性に関する責任を引きうけ、
- ・健康情報科学について個人として専門的な競い合いを許すような高い基準を維持する、とともに
- ・すべての人が健康情報に接近することを擁護する

な議論が行なわれたかは公式サイトからはえられず、採択された年の 1994 年次総会記録にも活発な議論は残されていないからです。

なお、この綱領に関連した公式文書は 3 つあり、それぞれ“倫理綱領概観”，“用語の定義”，“歴史と採択”の 3 文書です。いずれもサイトからその情報をえられますが、うち前 2 点は MLA News (それぞれ Mar 1994, Apr 1994) に、後 1 点は Bulletin of the Medical Library Association (以下、BMLA) Jan 1995 に参照があります。

これ以前の状況についてですが、BMLA で医学図書館専門職の倫理について論じている数少ない論文の著者 Crawford⁷⁾、Hurychら⁸⁾ がともに関心の薄さに触れ、例として前者は Handbook of medical library practice の第 3 版 (1970 年) の索引に、後者はこれを受けるかたちで第 3 版、第 4 版 (1982 年) のいずれの索引にも Ethics の語はないといっています。

2. 採択までの経緯

1984 年にさかのぼりますが、MLA の理事会は医学図書館員のための指針となるような倫理綱領作成のための特別委員会を設置し、5 原則について諮問を求めます。5 原則とは献身的サービス、非差別、信頼性、競い合い、それに説明責任です。

なお、この 1984 年という年ですが、酒井が雑誌「医

学図書館」で「MLA の専門職養成のための活動」について報告していますが⁹⁾、なかで、80 年代初頭まで個々別々の委員会の下で行われていた図書館学校でのコース認定、継続教育コース、認定制度の動きを戦略的に統合するための専門職能力開発計画概念の枠組を作成するための特別委員会が 1982 年に設置され、7 項目の委員会提言が 1984 年に承認されたこと、その提言中の 2 項目目に、“倫理規程による個人の職業に対する忠誠や能力の公示”がうたわれたといっています。したがって、提言が承認された同じ年に倫理綱領のための委員会が初めて組織されたことになります。

特別委員会は 1987 年に倫理綱領案 (当初案、表 1) を理事会に提出し、理事会はこれを受理すると、以降になすべき事柄について勧告案作成のためのタスクフォースを理事会内に設置しました。

タスクフォースは綱領に関する会員の関心の薄さからその時点での綱領案の採択は思いとどまるよう理事会に勧告します (1987 年)。

1990 年次総会中の“図書館と社会”と題されたセッションで“医学図書館専門職のための倫理”が議論され、協会として倫理綱領の価値と意義を議論する時期がやってきたことを出席者が確信するにいたります。

理事会は 1987 年案に対する会員の反応を探るための行動計画策定を求めて特別委員会を設置します。委員会は 1987 年綱領案を MLA News (Oct 1991) に注釈付き

表 3. 医学図書館員のための倫理綱領
(1994 Medical Library Association)

倫理的行動にとって必要な目標と原則

医学図書館員は、医療、教育、研究にとって、知識が情報に基づく意志決定に不可欠なものであることを確信し、情報に基づく意志決定がなされるうるということを保証するように働きかけることによって、社会、利用者、所属機関に奉仕する。

社会

- ・医学図書館員は、すべての人に医学情報への接近を促し、情報に基づく医療の意志決定を容易にするような要望や考え方や表現の自由な場をつくりだし、維持する。

利用者

- ・医学図書館員は、偏見を持たずに利用者の情報要求に応えるために努力する。
- ・医学図書館員は、利用者の私的な自由を尊重し、利用者との間の信頼性を保持する。
- ・医学図書館員は、最良の有用な情報が、利用者に確実に提供されるように努力する。

所属機関

- ・医学図書館員は、所属機関の情報要求や使命に応えるような知的情報システム（図書館）の立案、開発、倫理的運営に、リーダーシップと専門性を発揮する。

専門職

- ・医学図書館員は、専門職としての理念や理想を向上させ、保持する。
- ・医学図書館員は、専門職としての知識、基準を主導し、向上させる。
- ・医学図書館員は、寛大さと配慮をもって専門職間の協働を導く。
- ・医学図書館員は、専門職としての誠実さの高い水準を維持する。

個人として

- ・医学図書館員は、専門職としての質を高め、保つことに個人として責任を負う。

で掲載し、会員からのフィードバックを求めます。それらを組み込んで成った改訂版（改正案、表 2）が 1992 年年次総会中のオープンフォーラムで議論されます。この改正案は MLA News (Mar 1992) に収録されていますが、前文の存在と条文が 6 ヶ条である点を除いて各条文の内容、順番ともに変わっています。

1992 年、MLA 会長は倫理綱領の作成を託しタスクフォースを設置します。タスクフォースは 1993 年に綱領原案を作成し、1993 年年次総会中のオープンフォーラムで会員に提案します。原案は同年 6 月にメーリングリストである MEDLIB listserv に取り上げられ、その後秋の各地区会での検討を経て、最終案となったもの（表 3）が 1994 年 2 月に理事会で採択されます。

3. 当初案、改正案、最終案 その異同

1987 年、委員会が理事会に提出した当初案（表 1）では 5 原則（非差別、信頼性、献身的サービス、説明責任、競い合い）を肉付けした 6 ヶ条に前文が付きます。

このなかでは非差別、信頼性、献身的サービスの各原則がそれぞれ条文化され、説明責任原則のみが収集上の責任と関係法令遵守の条文に二分され、最後に競い合い原則条文がきています。前文は“MLA の一員として、私は次のような倫理的責務を有する”として続く 6 ヶ条にそれぞれ受け渡されます。

1992 年改正案（表 2）では、6 ヶ条である点は当初案と同じですが、各条文に付されていた原則付記が除かれ、説明責任原則に含まれていた 2 ヶ条分（収集面の責

任、関係法令遵守) がなくなり、非差別原則の項が書き換えられるとともに“すべての人が健康情報に接近することを擁護する”という条文が新設されます。

当初案、改正案とも主語は MLA の一員としての“私”でしたが、最終案となったもの(表3)では10ヶ条となったそのすべての条文で、主語は“医学図書館員”になっています。名称も当初案、改正案とも Draft MLA Code of Ethics ですが、最終案では、これに初めて“for Health Sciences Librarianship (日本語訳では、「医学図書館員のための」としました)”が追記されます。最終案では、このほか前文に、“倫理的行動にとって必要な目標と原則”という見出しが追加されます。

最終案では5原則中の非差別、信頼性の2原則がともに“利用者”の項に、競い合い原則は“専門職”の項に、献身的サービス原則は“所属機関”の項に、それぞれ含まれることになりました。5原則中で残りの説明責任原則は最終的に除かれます。かわって最終案前文に持ち込まれたのが“informed decisions (情報に基づく意思決定)”といった概念であり、改正案で初めて明記された利用者概念は最終案では“社会”の項で次のように明言されます。

“医学図書館員は、すべての人に医学情報への接近を促し、情報に基づく医療上の意思決定を容易にするような要望や考え方や表現の自由な場をつくりだし、維持する。”

最終案の“利用者”の項では非差別原則と信頼性原則がうたわれ、条文を新しくして「最良の有用情報の確実な提供」がうたわれます。同じく“所属機関”の項では「所属機関に対する責任」のほか、「図書館というシステムに対する責任」が明記されました。競い合い原則は、“専門職”の項で4ヶ条にパラフレーズされ、別項目の“個人として”で「専門職としての質を高め保つことは、個人の責任で行なわれる」とされました。

以上のような経緯から相当に活発な議論が行なわれたことが判ります。

4. Code of ethics for EAHIL members

EAHIL の Code of ethics for EAHIL members¹⁰⁾には前文はなく、本文は“社会”、“利用者”(こちらは MLA の倫理綱領で使われた“Clients”でなく“customers”が採られています)、“所属機関”、“専門職”、“個人として”の5項目とも(順番ともに) MLA のものと同じですが、各項目ごとに、引き続いたスペース中で使われている語句の説明が行なわれています。

MLA の倫理綱領では、語句の説明は倫理綱領とは異なる文書になっていて、サイトからと MLA News (Apr 1994) によって読むことができます。

EAHIL の倫理綱領が、各項目の構成を MLA のものと同じくし、条文も同じとした項目もあり(“個人として”の項はまったく同じ)、他の条文も換骨奪胎するようなかたちで踏襲しているところから、MLA の倫理綱領は欧州の医学図書館専門職に大筋で共有されるものだということがいえます。

5. CHLA/ABSC (カナダ医学図書館協会) と MLA 倫理綱領

ところで、Canadian Health Libraries Association/ Association de bibliothèques de la santé du Canada (カナダ医学図書館協会、以下、CHLA/ABSC) は、MLA のカナダ人グループと the Canadian Association of Special Libraries and Information Services (カナダ専門図書館協会) との協力活動を母体とし 1976 年に設立されたもので、現在はカナダの医学図書館専門職 400 人ほどをメンバーとする専門機関となっています。

公式サイト¹¹⁾の CHLA/ABSC/MLA Code of Ethics の項目前文で、CHLA と MLA は北米の医学図書館専門職の価値を高めるために分かち合われた倫理綱領の重要性を認めるとし、また前言を付して MLA の倫理綱領を掲載しています。前言には次のような表現があります。

“(CHLA/ABSC) 会員は、高い水準の専門的関与を行ない、(専門職としての) 質を求めて次に掲げる MLA 倫理綱領を保持するものとする。”

III. 1980 年代に米国図書館界で議論された倫理的事項

1. 倫理的事項とは何か

法的規制下にあるような職業に限らず、倫理的基準というようなものは、一般的意味合いにおいては存在します。図書館専門職にとっても何らかの基準は意識されています。ただ、特定の事件や状況下で判断しづらいことも多々あります。MLA の綱領にしても、これによって特定の事柄や、状況に対して具体的な回答がえられるというものではない、としています。そのように“ethical dissonance (倫理的不一致)”とか、“ethical conflict (倫理的相克)”とか、“ethical dilemma (倫理的ディレマ)”といわれるような状況はあります。American Library Association (米国図書館協会、ALA) の Code of Ethics of the American library Association, 1995

(ALA 倫理綱領, 1995)¹²⁾ 前文中にも“倫理的ディレンマは、価値が一致しないところでひきおこされる。”とあり、そういった倫理的な疑問、ディレンマ、困難さを引き起こすような事柄を“ethical issues (倫理的事項)”といっています。

2. 議論された倫理的事項

1980年代に米国図書館界で議論された倫理的事項は、Hurych らが概観しているところによれば次のように整理できます。項目として取り出してみました。

- ・専門職としての競い合い
項目では、競い合い、サービスの質、専門職としての権威、要件としての学位、継続教育、能力開発
- ・組織論
同じく、自律的組織対階層的組織、人事、機関の方針、専門職としての判断と機関内自律性、官僚的組織内での職員の匿名性
- ・信頼性
同じく、参考質問での、手作業や機械化された記録上でのプライバシー、オンラインサービス利用者のプライバシー、それらの守秘手順の明確化、情報への制限なしの自由なアクセス、課金サービス
- ・検閲性
同じく、自由で十分な情報アクセスとの関連で、図書館職員の中立性との関連で、ある種の情報提供、ある種の利用者への情報提供へのためらい、疑問
- ・個人としての責任
倫理的行動は個人としての責任、倫理綱領は個々人の専門職としての権威の代りにはならないこと、社会や時代が変わっても、善いこと、正しいことを自問することは、文化的でもあれば社会的存在でもあるわれわれの基礎でもあること

1980年代に米国で議論された医学図書館専門職にとっての倫理的事項は次の2点に整理できます。

- ・一般公衆からの健康関連情報の要求の増大が医学情報の提供局面に倫理的ディレンマをもたらしていること
(医学情報は原則医学医療専門家のためのもの)
医学医療分野で働く図書館員のための倫理綱領がないこと
- ・情報提供の法律的側面
情報過誤といってよいような局面の可能性
情報の提供が、情報の評価や医療上の助言となることへの危惧

情報の用いられ方に対する関心の薄さ

IV. まとめに代えて

1. もうひとつの背景

MLA が倫理綱領の起草に向けた当初の動きのなかで、意識していたのは、時期的に ALA の Statement on Professional Ethics, 1981 (職業倫理に関する声明, 1981)¹³⁾ だと思われます。MLA の倫理綱領当初案が同じ6ヶ条であった点にもそれはうかがえます。

ALA はこの倫理綱領を 1995 年に改定します。田村¹⁴⁾ が最近になって国立国会図書館 (NDL) のメールマガジンでこの改定について紹介していますが、田村によれば、その要点は対象が図書館で働く非専門職の人々、図書館理事会のメンバー、図書館以外の情報サービスに従事する人にまで拡張されたこと、その結果表題から“図書館員の”とか、“(専門) 職業の”といったコトバがなくなってしまう、ただの“ALA 倫理綱領”となったこと、本文の主語もこれまでの“Librarians”から“We”にかわったこと、などです。

ここで JLA の「図書館員の倫理綱領」についてみますと、前文中に「この綱領でいう図書館員とは、図書館に働くすべての職員のことである。」とあり、綱領で対象となっているのが図書館専門職に限らないことが判ります。

以上のようなことを背景にして、MLA の倫理綱領採択までの動きをみていったらよいと思われます。MLA の綱領は、最終案になってより専門職のための綱領という性格を強めています。

2. 補足的に

1980年代米国医学図書館界の状況をみるときに、外すことが出来ないのが、利用者概念の拡大です。利用対象者が医学医療専門家のみならず、患者、消費者にまで拡大し、情報提供に伴って新たな緊張がもちこまれたことを、この綱領の背景に読むことができます。

Crawford は、さきの論文で“A Panel on Ethical and Legal Issues in the Dissemination of Health Information to the Health Care Consumer at the Medical School Library Group meeting at the 1978 conference”に触れています。

MEDLINE で consumer の語でヒットした記事を BMLA に限定すると古いところから 1976 年に 1 件、次いで 1978 年に 1 件となります。したがって、この

Panel の試みは 80 年代の議論のさきがけとみなすことができ、とともに、こうした議論の起源もおおよそ 1970 年代後半とみることができます。なお、MLA が倫理綱領作成に 10 年を要したことの理由として、スナイダー足立は、1992 年に最終案作成のために設置されたタスクフォースの一員でもあった Katherine L. Lindner の見解を紹介しています¹⁵⁾。そこでは、10 年を要したことを、医学図書館のサービス対象を、医療機関関係者のみならず、患者や地域住民に対しても行なうかどうかの点で、経費負担の増加を嫌う医学図書館の反対があったからとしています。EAHIL の Code of ethics for EAHIL members では、MLA のものと同じ“社会”の項で“for all (すべての人に)”がうたわれますが、MLA のものにはない限定句 (“within the library's target groups in health care (医学医療の領域で図書館が利用対象者とする)”)が付きます。ここにも、議論の行なわれる余地があったことが判ります。

今一つの動きの反映が、90 年代になって綱領最終案に初めて盛り込まれた“*Informed decisions* (情報に基づく意思決定)”にみられますが、ここでは“*Inform ed* (情報に基づく)”というコトバがキーとなっています。

3. 学外利用者の現況

ところで、現在利用者概念としては、図書館公開といった文脈で扱われることが多く、これまでの図書館間で協力し合う仕組みにとどまらず、直接個人を(学外)利用対象者としてゆかなければならない局面が状況認識として考えられます。

現在、当館の学外利用者には埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA)メンバー館、JMLA メンバー館など図書館(機関)を介した利用者のほか、町立図書館利用登録者(一定条件あり)、当大学公開講座受講後(3年間)の者、県民に高度で専門的な学習機会を提供するためとして平成6年度に埼玉県が開設した事業「けんかつ県民カレッジ」受講中の県民(図書館等の施設利用を許可しています)、医学医療に直接従事する者、などがあり徐々に利用対象者として個人が視野にはいつてきています。

そういった視野の延長上に患者さんの姿もみてゆけばよいのだろうか? 主治医の紹介があった場合で、患者さんに利用していただいたケースがありますが、直接の館内利用には、仲介可能な情報源の乏しさから戸惑いのようなものがありました。ケースバイケースで対応する

ことしかできませんでした。医学部の教育研究支援を主な任務とする大学図書館が患者図書館機能を合わせて持とうとするには、簡単にいかない感じがおり、当館では議論もこれからという感じがあります。一昨年に行なわれた病院機能評価受審を機に、院内にはささやかながら図書コーナーが設けられました。病院機能の延長線上に図書館との接点をみつけてゆくという方向付けが現実的なところかもしれません。

4. 人事考課制度との関連

平成13年度に人事考課制度が全学的に導入され、平成15年度はその3年目になります。図書館職員は事務系と同じ評定項目で評定されます。一次評定者として、一部の職員の評定を行なっていますが、事務系と同じ評定項目では評価し切れないところがあり違和感が残ります。

この評定項目は、勤務態度、潜在的能力(理解、工夫、説明力)、顕在化した能力(成果)で構成されています。こうした組織人モデル(階層的関係が前提)にかさねるかたちで、プロフェッショナル・モデル(自律的協働関係が前提)を求めているところですが、今のところ手探り状態で、専門職のための倫理綱領はこの点でも手がかりになるかもしれないとの思いがあります。

5. 当館で問題になった倫理的事項

ちなみに、当館にも問題になった(議論となった)倫理的事項はあります。概念化したところではイコールアクセス、プライバシー、センサーシップに関係するものですが、先に触れた米国で行なわれた議論と比べると、専門職としての競い合い、組織論的議論といったところが倫理的事項に含まれると認識していなかったことが判ります。

当館では、昭和50年代後半の時点で職員の発意で職員会議(スタッフミーティング)をたちあげています。今も続いています。月一回と定例化されたもので、当初は議長、書記を職員の輪番とし、主に係単位で議題を出し、協議連絡報告が行なわれる仕組みです。こうした会議の必要性が議論されたときの状況は、倫理的状況といえなくもありません。

V. おわりに

ところで、イリノイ州内の the Health Sciences Librarians of Illinois (HSLI) に所属する会員を対象

に行われたアンケート調査結果が、さきの Hurych らの論文で報告されています (1987 年)。内容はカテゴリーに分けられた項目ごとに、倫理的事項としての判断可能性、その度合いをきいたものです。JMLA 内部でもこういった試みがなされれば、各館 (機関) で直面している倫理的事項が洗い出され、そこから倫理綱領を必要とするような状況がみえてくるかもしれません。共通の目標や行動指針があてい、と思うようになるかもしれません。

そのとき、先行する MLA の倫理綱領の存在は意味をもつことと思います。

参考文献

- 1) 日本図書館協会 1980.6.4 総会決議. 図書館員の倫理綱領 [internet]. <http://www.jla.or.jp/rinri.htm> [accessed 2004-02-02]
- 2) MLA Code of Ethics for Health Sciences Librarianship [internet]. <http://mlanet.org/about/etthics.html> [accessed 2004-02-02]
- 3) Bio-Medical Library (University of Minnesota). Mission Statement [internet]. <http://www.biomed.lib.umn.edu/admn/aboutmis.html> [accessed 2004-02-02]
- 4) (米国医師会) 150 年祭で「患者に最善をつくす」ことを再確認. JAMA 日本語版 1997;(6 月号):23-6.
- 5) 有田由美子. アメリカ病院図書室見学記—患者への医療情報提供—. 県立ガンセンター新潟病院医誌 1997;36(1):93-6.
- 6) 有田由美子. 患者への医療情報提供サービス: アメリカ 2 病院を見学して. 医学図書館 1996;43(4):477-83.
- 7) Crawford H. In search of an ethic of medical librarianship. Bull Med Libr Assoc 1978;66(3):331-7.
- 8) Hurich JM, Glenn AC. Ethics in Health Sciences Librarianship. Bull Med Libr Assoc 1987;75(4):342-8.
- 9) 酒井由紀子. MLA の専門職能力開発プログラムと認定制度. 医学図書館 2003;50(2):115-25.
- 10) Code of ethics for EAHIL members [internet]. <http://www.eahil.org/code-ethics.htm> [accessed 2004-02-02]
- 11) What is CHLA? [internet]. <http://www.chla-absc.ca/assoc/chlawhat.htm/> [accessed 2004-03-16]
- 12) Code of Ethics of the American Library Association [internet]. <http://www.ala.org/ala/oif/statementspols/codeofethics/codeethics.htm> [accessed 2004-02-02]
- 13) Code of ethics online: ALA, Statement on Professional Ethics, 1981 [internet]. [http://www.iit.edu/departments/csep/PublicWWW/codes/coe/American%20Library%](http://www.iit.edu/departments/csep/PublicWWW/codes/coe/American%20Library%20Code%20of%20Ethics.htm) [accessed 2004-03-15]
- 14) 田村俊作. ALA 倫理綱領の改定 [internet]. <http://www.ndl.go.jp/jp/library/current/no216/doc0002.htm> [accessed 2004-02-02]
- 15) スナイダー足立純子, Lindner KL. アメリカにおける患者, 住民への医学情報サービス. 医学図書館 1998;45(1):36-43.